

一九七七年一月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail : shakatsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幢ヶ谷九〇四 電話 03) 3337714 649

FAX 03) 3229915 367

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三二 労金 中央労金本店 No 1154163

購読料 月額 700円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■ 歴史の要請

伊勢 太郎……2

労働者の街から福祉の街へ

稲葉 耕一……3

―釜ヶ崎連帯交流― たくさんの支援物資を提供いただいて―

新人事賃金制度「能力主義」とは何か……5

社会主義協会の六十年と向坂逸郎(下)

稲村 守……6

恐慌の根本原因は何か

原野人……11

―向坂先生に学ぶ(三)―

読者からのおたより……13 編集部だより……10

旬刊 社会通信

NO. 1093

二〇一一年四月一日号

二〇一一年四月一日発行
(毎月一日・二五日二回発行)

財界は「生産性運動への協力、そして企業の支払い能力」が賃金決定の大原則との立場で一貫している。今回の『経営労働政策委員会報告』（以下『報告』と略記）は、一九七四年『大幅賃上げの行方研究委員会報告』として発表されて三十七冊目。この時、財界はインフレ、それに対抗して春闘でのたたかいを強めた総評労働運動封殺をめざし、生産性基準原理を提唱。民間基幹大企業（鉄鋼、電機、自動車、造船）労働組合の協力で支払い能力論浸透をはかった。

『報告』はその後、情勢の変化、支払い能力論の浸透度合いに応じ「賃金問題研究委員会」、「労働問題研究委員会」と名称を変え、二〇〇二年日経連が経団連に吸収された以降、「経営労働政策委員会」となった。くり返すが、貫く考え・思想は一貫して変わらない。現代社会が資本主義なのだから当たり前のことである。

今回『報告』の特徴は副題に露骨に示されている「労使一体となって、グローバル競争に打ち勝つ」。

その内容は①世界で生産、②競争はさらに激化、③競争に打ち勝つための労使関係、賃金体系、労務対策は何かを「情勢は新たな段階に入った」との認識から、長期の問題意識で作成されていることだ。

経団連は総額人件費管理、支払い能力論徹底の観点から①同一価値労働同一賃金、②定昇カブのあり方、③「年齢・勤続年数を軸とした」賃金体系から「仕事・役割・貢献度を軸とする」賃金体系へを強調した。こんな中で今年の問題提起は六七頁の一節だ。

「上場企業の営業利益に占める海外比率はアジア・太平洋地域の寄与もあって年々増える傾向にある。これは国際的な連結経営時代において、グローバル企業が協力して世界的で利益を生み出すことの重要性が一層高まっていることを示すものであり、国内法人の従業員の賃金決定を検討する際にも重要」としていることであり、これを来年以降具体化するために『春闘』を『春の労使パートナーシップ討論へ』がその問題意識となる。

前号の『資本主義は変革を求めている——二〇一一春闘めぐる諸情勢』で述べたように、現代情勢最大の特徴は資本主義の基本矛盾が、「新自由主義」、独占資本が主導する現代の自由貿易実行で爆発していることである。リーマン・ショックをきっかけとした世界的恐慌は、資本主義のあり方をめぐり大論争を巻き起こしている。一口でいえば「投機経済」の芽を摘むことが必要と、それが大金融資本の規制と管理、透明化である。

労働陣営についてもそれは同じ。連合は、新自由主義でない資本主義を「安心社会」と名付け、全労連はルールある資本主義を「新しい福祉国家」とする。

支配する側、支配される側が新しい社会像をもさくし始めた。これが物語ることは、資本主義に代わる新しい社会体制を歴史が要請しているということである。

（伊勢 太郎）

労働者の街から福祉の街へ

―釜ヶ崎連帯交流 たくさんの支援物資を提供いただいて―

交流三十年 去る二月五日（日）午後二時頃、車二台で釜ヶ崎三角公園近くに到着して、私たち連帯交流の窓口の全港湾労組分会へ到着を告げると、泊寛二委員長はじめ組合員の方々が支援物資受取に出てきてくれた。

今年の支援物資は例年になく特に多い。提供していただいた方のお名前を紹介する。柳生小の岡村・峠（舌古）・吉田さん、尾山の岩田さん、石打の加納・稲葉・東・村田・大白さん、左京の稲葉さん、天理夜間中の金・井上・東川さん、前裁小の井上さん、天理の車川・福島さん。特に石打が多いのは昨年「石打自治会通信」で私が呼びかけたためだ。また、柳生小の峠さんは遠く南伊勢で水産業をいとなむ実家の舌古さんから提供。なかみはほとんど男性の古着や毛布、くつなど。西成分会事務所の二階へ運んでくれた。

支援物資配布について質問した。組合に入っているホームレスさんに、まず希望のを取ってもらってあとは年十回（夏五日冬五日）、一般のホームレスさんがシャワー室でシャワーを浴びたあとに、並べてあるのをもらってもらう。シャワーは市との交渉で西成分会がイニシヤティブをもっているらしい。物資、みんなよろこんでくれているらしい。物資支援をいただいたみなさん、ありがとう。

そろったところで（二階分会事務所）自己紹介。こちらは奈労協から稲葉（代表）・福井さん、天教労から橋本（委員長）・森田（書記長）・寺脇さん、石打から西浦さん、堺ユニオンの美佐田さん、新社会党（大阪）の村上さん。西成分会は泊（委員長）・大木・田中・高崎・佐藤さんと例年より今年は参加者も多い。

奈労協（稲葉）より、初めて参加の人もいるのであいさつかねて、昔は稲垣さんの炊き出しの会（釜ヶ崎地域合同労組）と交流していたが、後半は奈労協と天教労（天理市教育労働者組合）の共催でこの西成分会とやっている経過を、三〇年以上一回来ている等、話をした。そして泊さんより街の歴史と現状を語ってもらった。

釜ヶ崎 今昔 大阪で万博があった頃は働く労働者が多く（毎朝たくさんの車が日雇労働者を求めて早朝むかえに）、ホームレスの労働者の街だったがだんだん仕事がなくなり高齢化し、このごろは生活保護（これも労組や支援団体が運動して）を受けている者（現在九〇〇〇人）も多く、シェルター（市簡易宿泊所）や低料金宿にたくさん寝ている。低料金宿は月ぎめ三分の一、日払三分の一、外国人三分の一くらい。病気にも保険がない。結核が多い。肉親しんせきとつながりがきれている人がほとんど。釜ヶ崎に現在一万五〇〇〇〇人くらい「住んでいる」。今ももちろん少ないが、早朝車で手配車が来て並んでいる。労働希望の人を乗せていく。

ホームレスの大木さんは「市のシェルターはならんで券もらえば泊まれるが、仕切りもないせまいところで、他人と寝るのは肉体的精神的に不自由でかなん。夏はクーラーない。外で寝る方がのびのびできる。」と。

新聞売りしていた田中さんは「駅構内で読み終わった新聞や雑誌を、ゴミ箱でひら

って外へ出して外のなかが五〇円くらいで売っていた。二人くらいのチームでやる。一日二万円くらいになったこともあった。このごろ駅側ができないようにいろいろしたり、市が条例で空きかん拾ってはならぬようにしたり締めだされて、仕事へらされている」と。

こんなからみでいろいろ話を聞き、あと釜ヶ崎の街の中を見学し、あいりん地区総合センターではたたくさんの荷物をもったホームレスの方が並んでいた。シェルターに入るための入場券（宿泊券）をもらうために待っているのだと思っていたが、支援団体が夕食の弁当を配っていた。

最後は街中の中華食堂で泊委員長を囲んで夕食懇親交流会もした。紙面でくわしく報告できないので、はじめて参加した人の感想を紹介する。

変えなくてはいけない

おっさんの街 鉄格子付きの西成署の前で四〇人ほどの行列があった。何かシェルター（公営の宿泊所）の整理券のようなものを配っていた。年配の男性ばかり、店のおばちゃん以外は女性も子供も見かけなかった。よそ者の私たちには全く無関心なようだった。分会事務所の向かいには山口組No.4が仕切る博打場があるからだった。

労働運動から福祉へ あいりんセンターではおにぎりをもろう人の長い列があった。毎日のように三角公園などのどこかでそんな炊き出しがある。組合・政治・宗教関係のボランティア団体が一〇あまり活動しているそうだ。センターのコンクリート床で寝ているホームレスの人の中には、穴の開いた運動靴をガムテープで貼っている人もいた。西成区は日本一結核患者が多く、医療センターで月二〜三回の無料検診があるというのが健康面も心配だ。

人を締め出すとする行政警察 大阪市は職安もあるあいりんセンターを、老朽化し耐震強度不足を理由に解体を狙っている。センターも夜間はシャッターを降ろし、ホームレスの人を締め出す。子供がいなくて閉校になった小学校の塀沿いにあった露店をすべて撤去させ、バリケードまで置いてある。かつての古雑誌やコピービデオなどを売っていた姿はどこにも見られない。四角公園は誰も入れぬようフェンスで囲っている。新今宮駅周辺の再開発を狙って、ホームレスや日雇いの人々を締め出すようとしているのだ。橋下知事も釜ヶ崎については口を閉ざす。金のかかる住民福祉については知らん顔なのだ。

また警察官の姿がなぜか非常に多い。路上に駐車している自転車ですらいちいち持ち主を呼び出して退けさせていた。また普通のおっさんの自転車を止め、持ち主確認で本署と連絡を取っていた。五〇〇〇円ぐらいで売られている中古自転車に防犯登録など付けてるわけもないのに犯罪者扱いをしている。

変わらぬ生活 しかし夕方、小さな鉄板焼きの店先で酒を飲みながら歓談する労働者の姿にはしたたかさも感じる。自分たちも交流会の後でそんな店で飲みながら「これが日本の都市の将来の姿かなあ」などと話していた。ただ、日暮れの三角公園でじっと立っまま屋外テレビを見ているホームレスの人達、その横の舗道上ですでに寝ている人たちの姿は異様に感じた。絶対にこの生活は変えなくてははいけないと思った。
(堺ユニオン 美佐田和之)

NHKで「無縁社会」の現状をやっているが「釜ヶ崎」も思い出す。今の世、私たちもいつ失業するかわからない。今日は人の身、明日は我が身かも。JAL（日本航空）も大みそかに解雇があった。失業の無い、働く者が大切にされる、働く者が主人公の新しい社会をつくらねばならないとの思いを強くした。

来年に向けて、また古着等を残しておいてください。そして何よりも一緒に釜ヶ崎へ交流に行きましよう。
(報告 稲葉耕一)

新人事賃金制度 「能力主義」とは何か

新人事賃金制度についての国労東日本本部の解明要求交渉が二月三日に行われたが、この中で「成果主義賃金か」との質問に会社は、「基本的に東日本においては能力主義ととらえている。」「会社としては能力主義の考え方を変えるつもりはなく、能力の進捗をベースに昇給の判断をしていきたい。賃金制度概念が大きく変わることはない。」と答えている(国労東日本「業務連絡報」No.1011)。

新人事賃金制度の骨格になっている「能力主義」とは何か。この問題を考えてみよう。

「能力主義」 労働効率(≡搾取)を高める施策

人事労務管理の本によれば、一九六〇年代半ば、それまでの学歴別年次別管理に限界を感じていた経営側の研究の結果が、一九六九年日経連から出された「能力主義管理」であり、そこでは「能力主義管理とは従業員の職務遂行能力を発見し、より一層開発しさらにより一層有効に活用することによって労働効率を高めるいわゆる少数精鋭主義を追求する人事労務管理諸施策の総称」と定義される。また、その理念として、「企業における経済合理性と人間尊重の調和を掲げ、仕事を通して自己実現をめざす」のが価値観だという(「仕事を通して自己実現」って、JRの『挑む』はこれをパクツタな?)。

能力主義管理は一九七〇年代以降の日本を代表する人事制度であり、そこでは職制とは別に、企業内で従業員の序列や処遇を明確にするために設けられる資格制度の運用が、職務遂行能力によって行われ(「職能資格制度」、賃金は年齢給・勤続給をベースとしながらも、多くの企業では、仕事の価値を重視する「職務給」よりも、職務遂行能力を重視する「職能給」によって基本給を決めている)。

ちなみに、一九九〇年代の平成不況以降に登場する「成果主義」は、高い成果を出した人にはそれに見合う処遇をするというものだが、職場の実態にあわず絵に描いた餅に終わり、見直しを迫られているとされる(以上、二〇〇七年発行有斐閣アルマ「新しい人事労務管理」より)。

日経連の「能力主義」 国労はどう考えてきたか

では、こうした「能力主義」「職能給」導入の動きに当時の国労は、どのように考えてきたのだろうか。労働旬報社発行 一九七四年国鉄労働組合編『国労読本③賃金編』から学んでみよう。

「賃金体系とは、個別企業内における個人別賃金の決定基準、および企業内賃金格差の複合体」であり、現在の問題は、「年功賃金体系の職務・職能給化」であり、「大別して、差別支配強化、賃金差拡大、『合理化』との一体化という三つの内容を有している。」

出発点は「戦後型年功賃金」であり、職務・職能給化が進むと、昇給線は、一級↓二級↓三級・・と上に重層化する。この場合、役職で等級をきった賃金が職務給、職務遂行能力で等級を決めていくのが職能給である。

ここでの昇給は、年齢が上がって生活費が増えるからではなく、一年・二年勤続して仕事を経験すればそれだけ熟練が高まるから上がるのであり、三年以上勤続が増えてもヒラ職にいるかぎり熟練は高まらないのでこれ以上賃金を上げる必要はない、というのが資本の理屈である。こうなると昇給のためには上の等級に昇進するしかなく、資本は、試験や人事考課で締め上げることができる。

人事考課のやり方は、責任感・健康など、「お互いに質の違うものをヤミクモに合計しているということ、たとえていえば長さ九段プラス重さ八貫目プラス面積五坪というインチキな算術と同じ」であり、「もつともらしいそぶりをしながら、資本家に都合のよいものに良い点をあたえ、都合の悪いものはいじめつけ差別するという結果をもたらすだけである。」

職務職能給 資本の差別支配強化

こうして「労働者個人個人の賃金と地位、昇給と昇進の決定権が全面的に資本家の手ににぎられていき、労働組合が労働者一人ひとりの生活の源泉である地位と賃金を守れなくなり、組合が弱体化せしめられる。」差別支配による組合破壊、これが職務・職能給化の第一の、かつ最大の役割である。

第二は、賃金格差の拡大であり、昇給曲線格差（↓生涯賃金格差）を拡大する。

第三は、合理化と一体（職務等級の設定は、職務別定員の設定と不可分、旧八幡製鉄の例）であり、「賃金体系という窓からみた『合理化』攻撃そのものなのである。」（九九頁〜一〇八頁）

四〇年近く前の本なので、第三の「職務等級云々・・・」の点はわかりにくいですが、年功賃金の職能給化（能力主義）が資本の差別支配を強化するものであること、人事考課の合理性・客観性のなさへの批判は秀逸であり、現在も学ぶべき点は多い。

社会主義協会の六十年と向坂逸郎（下）

何が「危機」なのか

七十年代前半の社会主義協会大躍進のためには、六十七年の太田派との社会主義理論と運動をめぐる、厳しい思想闘争が必要であった。社会主義協会総会における突然の規約改悪に反対・抗議して、一人総会会場を去って向坂代表は立ち上がった。ここで曖昧にしていたら、せつかくの有利な情勢の変化があっても、社会主義協会はあくまで大きく前進することは不可能であっただろう。

二〇一〇参院選で大敗北したから、社会主義では展望ないし社会民主主義の概念規定を変えてこれを容認し、「共同戦線党」でいこうという意見が出された。しかし向坂先生ほど社会主義政党の重要性を強調された人はいなかった。そのために社会主義協会をつくり、私たちが六十年努力してきたのである。

目前の護憲政党の数あわせ論で行ってしまい、社会主義革命の客観的条件が成熟したときその「共同戦線党」はどうするのだろうか。そのとき急に「共同戦線党」を階級的強化するのか、社会主義者だけで分離独立して急ぎ結党し革命するのか、資本主義の大矛盾を指をくわえて見ているのか、はたまた「社会主義革命」の概念規定を変

えて革命しなくてもすむようにするのだろうか。

何かこの十年で急にプールが小さくなったから、看板をすげ替えてほそぼそやっている元のプールの方が比較的われわれのより大きそうなプールだから、多少淀んでいても両プールの境目を壊して合流しようという意見が、昨年初めから急に出てきた。そっちも細々だが、老舗だけあり政党要件は持っているから、と。「社民党への合流」では聞こえが悪くて行く人も行かなくなり、「なだれこみ」ではおこがましいし、「共同戦線党で行く」くらいだと乗り切れる、と。

前号の熊さん・八さん論議を展開する「2チャンネル・インターネット掲示板」などの世界では、私のような議論は半世紀も前の、高度成長期で社会党・総評ブロックの全盛時代の向坂論文を根拠にしているから論議以前なのだそうである。ようやくそういう「危機感」がわかり、協会も新社会党もそこまで（淀んだ元のプールへの合流）の議論となったか、というのだそうだ。遅いくらいだ、と。

九十歳近くまで、最後まで生命ある限り生き抜き、運動に「危機感」などいささかもふりまかず、微動だにせず社会主義者として生きた向坂逸郎、その人に残念ながら真に学んだ人は少ない。

そして「稲村は古い」と言っている人たちの言っていることは、もっと古いイタリア共産党の猿まねである構造改革論と同質なのである。社会主義運動を改良・改革の積み上げで社会主義革命なしの社会主義政権をめざす、そのために「社会民主主義」規定を変更する。「今日では民主主義を拡充する改良の運動という以上の特別の意味をもたない」と。ちょうど五十年前、向坂先生は二冊の編著で全面批判を構造改革論に対して行い、至当にも葬り去ったのである。その弟子たちの一部に、その師が葬り去った理論の切れ端を後生大事に発掘してきたものがある。古文書どころのようにしていないが、その人たちは向坂先生の何を学んできたのだろうか。

誰も分析していない二〇一〇参院選の敗因 Aさんへの手紙

「このごろ改めて感じたことがあるのですが、かつて自民政権だったから、自民党というのは大企業のために悪いことをやる政党だから一定しばいておく必要があるだろうということ、共産党や社民党に人びとは投票していたのではないか、ということ、決してそれらの政党の綱領や政策を理解し、賛同して入れていたのではないのでは、ということ、それを『この市ではうちは何万票』とか『全国でなんぼ』とか、勝手に票読みして錯覚していたのではないか、ということ、だから両党ともかなり前進すると思っていた昨夏参院選挙で大敗北したのではないか（共産党においては〇九衆院選で『後退に歯止めがかかった』と分析もし、ということ、社民党も言ってますが、そんなことはやる前から分かっていたわけで、そうでなく三党とも『この間、派遣切り反対や貧困と格差問題や沖縄米軍基地撤去やなんかやと運動してるから、この参院選ではきつと伸びる』と思っていた、それが真逆の結果になって、そのこと（抑止力論での投票）に気づいてないので、原因不明のためがっかりしているのではないですか。

従って、①自前の票固めをしないといけないということと、②有権者の心をつかむ

党の特徴ある政策・理念・綱領（私たちなら、日本的・現代的な社会主義の構想）を打ち出して支持を受けられない限り、『自民党が倒れたから』とかいう他力本願では大きな錯覚に陥ってしまうと思うのです。社民党みたいなところが沖繩では比例区で第一党になれるのは、県民の意識・要求にぴったりきているということなんでしょうね。私の職場である京都で、参院選挙区で二〇万票を共産党が切ったのは（一八万五千でしたか）、四五年ぶりとかで、まわりの方々がずいぶん頭をかかえていました。かつてのような「歴史的役割」を担っていないのでしょね。酷ですが。このようなことは、Aさんのようなプロにお互いの政党の宣伝しても仕方のないことで、なぜ主体的情勢がここまでおちこんでいるか、本音で探ることが、今、とても大切になってくるのではないかと思うのですが。このことは、今Aさんに初めて書きました。自分の党内でも誰にも言ったことがありません。どこでも、『結果は厳しかったが、やったことは前進だった。いろいろ学んだ』とかいうなぐさめばかりなんです。それから、それはだめですね」。

このAさんとは子どものPTA活動で知り合い、何年も年賀状のやり取りをしている日本共産党員の活動家の女性である。やはり「革命を忘れた共産党」ではだめだということなのである。そして革命を名実ともに捨て去った社民党、その枠内で選挙する新社会党などもう不要だということだ。自民政権だから一定共産党と社民党に「抑止力」を求めて人は投票していたのであり、自民党が野に下ったら、社共の意味は特別な地方を除いてもうないということ。これは衆院小選挙区制や二大政党制、政党要件・政党助成金やマスコミの差別取り扱いだけが悪いとはいえない。

政党要件のある政党の中で社会主義政党はなくなり、護憲政党ではある社民党（看板どおり社会民主主義）はもとより日本共産党も社会民主主義政党に成り果てている。二〇〇四年改訂で日本共産党の綱領は資本主義の枠内での民主主義をめざすこととなった（「反帝国主義・反独占資本の新しい民主主義革命」から「資本主義の枠内でも可能な民主的革新」へと）。そして私たちの周辺でも「共同戦線党」論が出てきた。資本主義の搾取から労働者を解放し基本的矛盾を解決する社会主義政党が、今や少なくともこの日本から消え去ろうとしている。これは確かに危機である。

社会主義は流行のファッションではない

「流行はパリからというのが服飾界の特徴だが、今度の『構造的変革闘争』というのはイタリアからである。いずれにしても外国からという点では変わりない」（前掲向坂編『社会主義革命論』野中卓執筆）。今ならグルメブームで「イタ飯」の話など出てくるようなところがそれはないのが時代を反映しているが、向坂先生は社会主義は流行のファッションではない、外国の権威に頼らず自分の頭を自分の肩に載せるように常に戒めた。前出「共同戦線党」論者は「ドイツ左翼党や韓国民主労働党、フランス左翼諸派の共同の模索等、影響力を有する政党のあり方」を錦の御旗にしている。

第二次大戦後日本共産党は米占領軍を「解放軍」と規定し、人民民主主義論ももてはやし、コミンテルン批判で一転してアメリカからの独立の武装蜂起革命が必要だとし、今はそのさかさまとしての人民的議会主義、公務員全体の奉仕者論・教師聖職者論、プロレタリアート独裁の訳語変更からそれ自体の削除、自主独立路線から社民主

義の採用へと変転常なきものだった。そのリーダーに構造改革論者であった不破哲三・上田耕一郎兄弟がいたというのもむべなるところだろうか。一方、六十年代後半からは毛沢東率いる中国文化大革命という極左路線ももてはやされ、構造改革論同様、社共の一部にも影響を与えた。

太田派との分裂後だけをみても向坂先生はそれらの批判活動を直ちに展開し、日本共産党批判論文集発行以外でも、『教育と教師』（一九七四）、『日中「共同声明」と社会党』（一九七五）、『プロレタリアート独裁』（二〇七七）をいずれも自らの陣頭指揮で編集され社会主義協会から出版された。

とりわけ七十五年五月十二日の日本社会党第六次代表团（成田知己委員長が团长）が北京で締結した共同声明を全面批判した緊急出版は、それまで一心同体で運動を進めてきた向坂・成田の仲を切り裂くものとなった。これはソ連を覇権主義と規定する声明で、日本社会党の基本路線を大きくゆがめるこの日中共同声明を認めることは、日本社会党を社会主義政党として強化する運動に決定的禍根を残すものとしての判断だった。批判書発行は二人の仲のみならず、社会主義協会の組織と運動に決定的ダメージと損害をおよぼすものだったがこれを決断した。

多数派・主流派で行くことは楽である。人間関係もつくるのは並大抵の努力でないし、長年月を要する。それを一瞬で失うことを決断するのは、しのびがたいものがあっただろう。しかし社会主義政党の生命である基本路線をないがしろにする訳にはいかなかったのである。その勇気と社会主義の魂を向坂先生は示したと思う。

自分の頭は自分の肩の上にのせること

プロレタリアート独裁の社会党右派は言うにおよばず、日本共産党の無理解も毛沢東主義の平和革命論についての認識の誤りも、第二次大戦後ほんの三年後の『日本革命を語る』で、すでに言い尽くされている。従って、社会主義政党の重要性の指摘も、闘う総評も社会主義世界体制の確固とした確立もまだなされていなかった四十八年に、向坂先生はすでに明言しているということだ。今日の「共同戦線党」論者が言う、総評解散と社会主義世界体制崩壊で向坂先生の社会主義政党強化論の根拠が失われたというのは誤りである。

近年、この向坂先生の教えの真髄ともいえることが希薄になつていくところがある。残念ながらそのことを嘆いた若者が、最近一人だが運動を離れていつてしまった。「君たちは決定に従って活動したらいい。自分で考えなくていい」という「危機感」であつたある幹部の暴言で、一人の将来あるかけがえのない若い有能な芽をつんでしまった。

社会主義をへアー・スタイルや女性のスカートのごとくとらえるのは、猫の目のようにくるくる変わる戦術・方針変更は、マルクス『資本論』の資本主義的蓄積の一般的法則、いわゆる窮乏化法則の「必然」の理解が不足していることに起因している。かつては六十年代構造改革論者のように「窮乏化革命を否定するためにこの理論を作った」という確信犯であつたが。

今、例えばベーツシクインカム論というものが浮上している。これはまるで「空想から科学へ」とせっかかく発展してきた社会主義を逆に引き戻すものであると思うのだ

が、新進気鋭の研究者たちが編集し東京の津和崇さんなどが推薦されている『新自由主義批判の再構築』（二〇一〇、法律文化社、岩佐卓也編著）で、これは「均等現金給付主義」であり「新自由主義的な福祉政策」であり、「ある意味で究極の新自由主義政策というべきだろう」（二六六・七頁）と喝破しているが、正鵠を得ている。

（稲村 守 二〇一一・二・九）

独占資本の犯罪―福島原発の重大事故

東電福島原発は重大な事故を発生し、まだどこまで深刻化するかわからない。

第一の1、2、3号機はいずれも大地震で当然に制御棒が入って緊急停止したが、冷却水供給、循環ポンプは止まり、原子炉内の水位は低下した。だが緊急炉心冷却系(ECS)は機能せず、炉心(核燃料棒束)は上部からだんだんに裸となって、核分裂生成物の崩壊熱で溶融するに至った。

「四重にも五重にも防護する体制をもっているから、日本の原発で炉心が溶融するような事故は決して起こりえない」というのが、昔から電力独占資本、政府、関係省庁の主張であった。しかし福島原発では彼らの想定をはるかに超える大事故に進展した。

巨大地震と大津波はそれだけで悲惨な事態をもたらす。そこに放射能の追い打ちをかけるようなことは絶対にあつてはならない。われわれはこの四十年來、地震列島に原発を造ることに反対してきた。大地震の時などはそれらの安全システムが機能しないこともありうることを警告してきた。残念ながらその懸念が現実となった。

高温となった燃料被覆管は水蒸気と接すると水素をつくる。それが建屋など空気のあるところに集まれば爆発的に燃焼する。この水素爆発によって1、3号機の建屋は吹き飛ばされた。2号機ではもつと深刻だ。格納容器の下部ドーナツ型の部分に水素も酸素もたまつたのであるう、その内部で水素爆発が起きたらしく、「最後のとりで」の格納容器を破損させてしまった。原子炉周辺の重要配管等も破損したかもしれない。

格納容器をもっていてそれが破損したのは世界で初めてだ。これによって放射能の絶対量がいかほどかは、明らかにされないが、すでに多くの人が被曝している。退避をせまられた住民の労苦は大変だ。放射能は二〇kmや三〇km以内にとどまらない。決定的な作業を強いられている労働者の被曝は最も深刻だ。

海水を注入して炉心を冷やそうとするのだが、発生する水蒸気によって圧力が上がるので、消防車などのポンプではなかなか入りにくい。コントロールがほとんど不可能になっている機器で、給水量と圧力と水位をコントロールするのがどんなに困難なことか。灼熱した炉心に水が急激にかけられれば、水蒸気爆発も起しかねない。

定期点検で停止していた4号機でも水素爆発と火災が起こった。使用済み燃料棒を沈めているプールで水を冷却できずに蒸発し水面が下がり、燃料棒が露出して高温になり、ここでも水素が発生して建屋内で水素爆発を起こしたのだ。格納容器の外だけに、この燃料棒の溶融・破損はその中に閉じ込められていた放射性ガスや気化しやすい放射性物質をもろに外部に放出することになる。

一番水がなくなっていた3号機のプールに、今日は自衛隊のヘリで上空から水を入れようとしたが、霧のように飛散して、プールにはさっぱり入らない。機動隊の高圧放水車でどこまでできるか。4号機も切迫しており、さらには5、6号機も加わって、全機ともプールの液面が下がっている。

炉内の海水注入が一応は「成功」しても、崩壊熱の発生は長く続き、発生する水蒸気は相当の放射能を含みながら、大気中に放散される。それがいかほどになるか。高度に汚染された水も大量に排出される。水産物の汚染も重大だ。

もし炉内の冷却に失敗すれば、燃料は溶けて制御棒のないところに沈んで再臨界を起したり、原子炉の底も格納容器の底も溶かして外部に出してしまうことにすらなりかねない。この火の玉は何らかの水に接触する瞬間に水蒸気爆発によって莫大な放射能飛散となる恐れすらある。

（三月一七日記 原 野人）

恐慌の根本原因は何か

— 向坂先生に学ぶ(三) —

恐慌と労働者階級

一九九七年以降、労働者の賃金は下降している。そのさなかに起きたこのたびの恐慌を見て、「賃金の上昇が恐慌の根本原因だとする宇野（弘蔵）君の理論はここでも破綻だね」と向坂先生の声が聞こえるようである。『恐慌と労働者階級』を見てみよう。

「——過去の恐慌時についてもしばしばそうですが、とりわけ一九七四年に始まる現在の恐慌（不況）とその長期化の中で、わが国の労働運動や社会主義運動が全体として低迷ないし後退を続けています。勤労大衆が闘いの前進を最も強く求め、しかも闘いの条件が広範に作り出されているにもかかわらずです。当面の闘いだけでなく、社会主義をめざす長期の闘いの展望においても、恐慌下の闘いを、どれだけ大衆的な広がりをもった力強い闘いとして組織できるようになるかならないかが、今後の階級的労働運動と反独占統一戦線の前進にとって、極めて重大なかぎを握っているといつても過言ではないと思います。その意味で、恐慌下の闘いのあり方について、先生のご意見をかいつまんでお聞かせいただきたいと思えます。まず、恐慌をどうとらえるか、という問題から

向坂 近頃の学者や理論家には、新しがり屋や独創がり屋が多すぎるよ。恐慌とは何かについても、階級闘争を組織するうえで必要な限り、マルクス・エンゲルスとレーニンによって、基本的に十分に明らかにされています。『資本論』には恐慌という特別の章や節はないが、また恐慌そのものを直接に論じた本ではないが、恐慌を階級闘争との関連でいかにとらえるべきかについても理論的に説いています。その要点を見事に、極めて簡潔に要約しているのが、エンゲルスの『反デューリング論』の第三篇、そのエキス部分をパンフレットにした『空想より科学へ』の第三章「資本主義の発展」です。『共産党宣言』もぜひ併せて読むべきです。高橋（正雄）君や、宇野君、大内（力）君、それに多くの新しがり屋や独創屋の学者たちは、エンゲルスを過小評価したり軽視したりしているようだが、それは経済学をほんとに解っていない証拠だな。

恐慌 資本主義の基本的矛盾の爆発

——その要点といえますのは

向坂 そこを読んでもらえば分かることだが、資本主義の基本的矛盾を生産の社会的性質と所有（その基本は生産手段の私有）の資本家的私有との矛盾としてとらえ、そしてここに資本主義のいっさいの諸矛盾の根源があること、恐慌もこの基本的矛盾の集中的、周期的な必然的爆発であること、したがって、恐慌は資本主義が続く限りなくならず、社会主義において初めてなくなり、克服されるということです。このことは、資本主義ではどこの国も例外なく恐慌がくりかえし起こり、社会主義の国では

どこにも起っていないのをみても、現実にはつきり実証されています。だから、エンゲルスは、(恐慌においては、社会的生産と資本主義的取得(所有)との矛盾が猛烈に爆発する)『空想より科学へ』岩波文庫、七八頁)といい、また『宣言』でも、恐慌を(近代的(資本主義的)生産諸関係に対する、ブルジョア階級とその支配の生存条件である所有諸関係に対する、近代的生産諸力の反逆)(岩波文庫、四七頁)といっています。

このことを、具体的にこう述べています。(近代的機械の改良能力は極端にまで増加しているが、社会における生産の無政府性に媒介されて、この能力は個々の産業資本家にとって、自分の機械をたえず改良し、その生産力をたえず高めねばならぬという強制命令とかわった。大工業の異常な膨張力、これに比べればガスの膨張力などはまことに児戯に等しいほどに大きい膨張力は、われわれの眼前に、いかなる障壁もものもしない質的および量的膨張欲として現れている。その障壁をなすものといえば、消費費であり、販路、すなわち大工業の生産物の市場である。しかもその市場の膨張力は、さしあたりは右とはまったく別個の、広さにおいても強さにおいても、右の力に比してはるかに弱い法則によつて支配される。市場の拡大は生産の拡大と歩調が合わない。衝突は不可避となる。しかも、資本主義的生産方法そのものを破壊しない限りにおいては、ほかに解決はありえないから、この衝突は周期的になる。資本主義的生産は新たな『悪循環』を作り出す)『空想より科学へ』七七頁)

“こえ太りすぎ”た反動

——少しくだいた言い方をしますと、こういうことでしょうか。独占資本は最大限の利潤を手に入れるために、恐慌(不況)に突入する前の段階・好況期に、一方で、国民の圧倒的多数をなす労働者と勤労国民の購買力を低く抑えつけたまま(低賃金をはじめ)、他方では『合理化』を不断に推進し、設備、生産、販売をどしどし拡張する。

この結果、やがては設備と生産が過剰となり、恐慌(不況)が来ることは、資本家も資本家なりに経験で知っていますが、好況という一番もうかる時期に、生産や販売の拡大をあえて手控える資本家などいるわけがない。“もうけにや損損、あとは野となれ山となれ”である。こういう状況が一定の頂点に達した時、全般的な過剰生産すなわち恐慌となって必然的に爆発する。だから恐慌は、天災・地変でもなければ、凶作・飢饉でもない。ましてや労働者が怠けて働かなかつたせいでももちろんない。むしろ反対に、労働者をはじめ額に汗して働く勤労国民の汗を搾られるだけ搾りとり、徹底的に搾取を強めることとひきかえに、一握りの独占資本が利潤をしこたま手に入れ、こうして、独占資本がいれば“こえ太りすぎ”た反動の必然的産物である。だから、不況は“国難”だから全国民、労働者も我慢せよ、犠牲を甘受せよなどというのは、まったくの筋違いだということ

向坂 そうです。労働者の生活苦や労働苦がいちだんと激しくなっているのに、不況・赤字だから仕方ないといった空気がかなり強いのは、そうした恐慌の本質を、労働者がいま実際におしつけられている非人間的な実態——その半面で、独占資本だけは太り続けている——と具体的に結びつけて、徹底的に暴露していく努力がきわめて

弱く不足していること、それに、独占資本とマスコミの巧妙な誤魔化しや問題のすりかえ、いわゆる不況・赤字宣伝という思想攻撃に対して、真正面から反撃し暴露していく構えと活動が弱すぎるからです。不況・赤字「克服」、景気「回復」、安定成長への「移行」などを口実とした首切り『合理化』と倒産で失業させられている労働者は、政府が言う『完全失業者』だけでも一〇〇万人余、実際の失業者は恐らく一、〇〇〇万人をこえているでしょう。『現役』の労働者も、不断から無茶苦茶な低賃金の上に、不況・赤字を口実にさらに切り下げられ、失業も同然と云っていい生活苦をおしつけられている。職場では、人減らし『合理化』の中で、労働強化と長時間労働を強いられ、身体ごといわば「スクラップ」化されつつある。農漁民も小企業者たちの実態も大同小異です。こういったことが、本当は社会の主人公であるはずの額に汗して働く労働大衆の側で、しかもものが「過剰」という状況の中で激しく進んでいるのです。

こんな実態が進行しているときに、不況だから仕方ない、赤字だから仕方ないというところで、『合理化』を認め、賃上げを自粛し、赤字国債もやむなしなどといったら、勤劳国民のいま当面の切実な利益を守りえないだけでなく、資本主義は労働者と勤劳大衆の犠牲のうえに、いつまでも続くことになる。』（『愚者の道』新評論）

（原 野人）

◇ 読者からのおたより ◇

人間らしく生きるために たいへんな社会になっていますが、人間らしく生きられる社会をめざします。

（福岡県筑後市・K）

編集部より 『まなぶ』で連載中の「三池闘争の教訓」、楽しく読んでます。

万歳できる日 先日は激励に駆けつけていただきありがとうございました。両手を挙げて万歳できる日が早く来るよう、精一杯奮闘します。しばらくお力添えを。

（国労音威子府闘争団・S）

編集部より 一年ぶりの音威子府、皆さんの元気な姿みて嬉しかった。今度は暖かい時に、「万歳できる日」へ私も。

一 春闘関西日本討論集会

場所は徳島。特別報告は①東横イン労組、②東京から駆けつけたJA Lキャビンクルユニオン。争議報告は①国労闘争団、②昭和シェル石油、③教育合同大阪夕陽兵支部、④全港湾丸久分会、⑤四国電通合同、⑥徳島県教組、⑦郵政ユニオン、⑧広島スクラムユニオン。大阪夕陽兵支部。昭和シェル労組の長い闘いからついに勝利をつかんだ報告に会場は大きな拍手に包まれた。

（全労協fax情報）

楽しみ 購読料です。些少ですが今までの残金と残りはカンパとさせて下さい。ますますの楽しみとさせてもらっています。

（愛媛・H）

編集部より カンパに感謝です。どんなテーマがいいのか知らせていただければ嬉しい。

「資本論」学習会 神津朝夫氏（知っておきたいマルクス『資本論』の著者）を迎え『資本論』第一巻を月一回、二年計画でやり遂げようという「壮大な」計画。詳細はこれから。（しが・I）

編集部より 私めは『空想から科学』『賃労働と資本』を若者と学習中。『資本論』への心意気、私も奮い起こさねばいけません。

十六年目動き出す 神戸大震災（一九九五）から生まれた被災地メーデーも今年で一六回目を迎えます。今年一月十一日に「今年のメーデーを考える会」を開き、議論をスタートさせました。

（被災地メーデーニュースNo.1）

編集部より 今年のテーマは「たてとよこ動きつむぐ、つなぐ」「長田から きずなつむげ、つなぐ」などが出されているということ。三月十一日、M9・0の巨大地震神戸再びです。

反原発自治体議員連（準）誕生 一月二十八日、都内で上記結成のつどいが開かれました。議員二十数

名、市民四十名弱、計六十三人の多様な参加でした。主催者挨拶は福士都議。各地報告は①浜岡、②東海村、③核燃料輸送車・サクラ調査、④原子力空母反対など、当面は統一自治体選での反原発議員当選めざし、五月正式結成を目指しています。

編集部より 地震列島日本と原発。その恐怖が指摘されて久しい。今回の大地震…、その中での福島第一号原発の「炉しん溶融」の重大事故。会への期待大ですね。

原野人さんのコメントを載せて 今回の地震の結果、その存在が分かりかけた『原発』。『エネルギー源としての原発選択は間違え』の信念で社会党政策審議会を追われたと聞く原野人さん、今回の経過から想像される結果とその恐怖を、この紙面で教えてください。私は主婦だから、海辺に林立する『原発』は膨大な量の海水を温排水化で微生物を殺し、放射能まみれの死骸を食べる沿海・近海魚とその食物連鎖が気になります。利口なイルカや鯨の方向舵はなぜ狂うのかなど、現行のメディアだって『そうだったのか』とは語れない記事を貴誌に期待します。

牛久市議会3月定例会で 牛久市地域防災計画「震災対策計画編」について質問しました。「本市は、地震国日本の中でも有数の地震多発地帯のひとつである関東地方に位置するため、過去様々な地震の影響を受けています。」とあります。

そして実際に、七九年の津波被害から始まって、二〇〇五年一〇月の地震まで、例えば一八九五年のM7.2の震ヶ浦付近の地震、一九二二年のM7.0の龍ヶ崎付近の地震など、一日本被害地震総覧一から引用して、牛久市が影響を受けた地震を具体的に列挙しています。さらに、それらの震災履歴を踏まえて、「第4節 前提とする地震被害の想定」の「1」想定地震の設定で、「地震動予測に用いた想定地震は、「首都直下地震対策大綱」の考え方に従い、本市に最も大きな影響をもたらすであろうと考えられる地震(直下地震)を想定しました。」としています。

「首都直下地震」とは、南関東直下地震とも呼ばれ、二〇〇七年〜二〇三六年の間に、関東地方の南部(神奈川県・東京都・千葉県・埼玉県・茨城県南部)に七〇%の確率で発生すると想定されている、マグニチュード7級以上の大地震で、直下型・海溝型・海洋プレート内の全ての地震が想定されています。私は、これらの検討と対策は必要なことと考えますが、東海村をはじめとする原子力発電所が震災を受けた場合の検討が抜け落ちていることを指摘せざるを得ません。

(茨城県牛久江市市議会議員 杉森弘之)

みなさん、無事を祈りつつ 私は、山梨県の「河口湖障害者モニター点検ツアー」というのに参加しての帰りに、東日本巨大地震に遭遇。河口湖周遊レトロバス(代行ノンストップバス)に乗車している時に地震があった様で、河口湖駅に着いて、いざ富士急行に乗りしようとしたら、電車がストップ。河口湖駅検で知った河口湖駅近接の観光案内所に車いすトイレ、そこで電車が動くのを待機したことが幸いして、もう電車が動かないことが確定した後、停電中の中、ホテルのどこも(臨時)客を受け入れない。河口湖町の計らいで、社協からリフト付バンで河口湖町役場へ搬送して下さり、ガストープと非常電源で電灯の付いた会議室で、地域避難のおばあちゃんとお小沢へ帰りあぐねた帰宅難民の人ととで、おにぎりやみそ汁をよばれて、灯りはつかないまでもちゃんと流れる車いすトイレがあり、とても温かいホスピタリティーで一夜を過ごせました。翌日、とるところ富士急行とJR中央線、JR山手線等で無事帰宅。みなさん、現在の電気の発電システムはとも不安定で非合理です。原発集中発電システムをもっと水力・風力・太陽熱・火力と分散した方が良いと痛感しました。

(東京・電動車いすユーザー)

東京そして土浦 揺れが始まった時、私は渋谷税務署の七階で確定申告の手続き、二百人ほどがざわつくなか、陣頭指揮者が現れ「机の下に」と大きな声。不安を隠せない私たち一人ひとりに職員が声かけ誘導、やっと落ち着き手続きを終え帰宅へ。バス以外の公共交通は止まり、高速道路も閉鎖。ゾロゾロと無言で歩く人々の群れ、のろのろ車の列、渋谷や新宿は異様でした。途中の建物は水漏れマンションのビル。私が働く事務所は、築四〇年余、九階と十一階の二棟がTの字に建つ古いマンションで、その九階建ての最上階にある。二つの棟はぶつかり合って、五階以上の隅々ではコンクリートの破片が飛び落ち、壁のひび割れ多々。部屋の内部はパソコンや本、書類等が散乱し足の踏み場もない状況。一人で仕事から戻った女性は「もう、死ぬかと思った」と、品川まで線路伝い歩いて三時間かけて帰宅。事務所から見える都庁など新宿の高層ビル群は、ゆらゆらと大きく揺れていたという。私の実家、土浦市は停電と断水が続く大騒ぎだった。震ヶ浦のマリーナ周辺は液状化。水面はこんなにかと思うほどの大きな魚が凄まじい勢いで一斉にジャンプしたとか。この時ヨットに乗っていた学生は「急に魚がドカドカぶつかってきて、何が起こったか」と、水上では地震は感じられなかった。五日目には電気・水道が回復、放射線を気にしながらガソリン求めてスタンドに三百台の車の列、電池と水等日用品は店から消えた。(東京・T)